

# 戦争はウソツパチ合戦

## オッフエンバックのオペレッタ



### オペレッタは反戦物

いま、NHKの木曜講座では、オッフエンバック(1819-1880)の傑作オペレッタ《ジェロルスタン大公妃殿下》(1867 初演)を観ています。これはむろん、「戦争」を風刺した「反戦物」ではありますが、フランスの国内外の政治家や軍人やお金持ちの武器商人たちがこぞって嬉しそうに観に来ました。自分たちが非難され、笑われていることを知っていながら、まったく、意に介(かい)しません。オペレッタのお話はウソだと知っているからです。

でも、舞台にいる歌手たちや俳優たちや舞台の奥にいる劇場支配人や作曲家や演出家や作家たちも、まったく違っていました。彼らも大喜びで、このオペレッタを、観たり演じたり歌ったりプロデュースしたりしていました。そして、戦争を防ごうと、あれやこれやと過激な戦意を、戦争屋の言う開戦口実はウソだと知っていたからです。

また、天井桟敷にいる市民たちも、まったく違っていました。彼らは、戦争に飽きた厭戦主義(えんせんしゅぎ)たちでした。主人公の女妃殿下が「若い兵士が大好きよ」というと、大きな声でやじりました。ブン大将が、「女妃殿下がご退屈なさっているので戦争を始めたのだ」と開戦の経緯を述べると、ブーイングが飛びました。舞台上で、だれかが何かしゃべると、それが、どんな台詞であれ、だれが主人公であれ、クソミソにけなしました。それも、必死になって叫びました。彼らは、「明日、戦争に出かけるのは俺たちだ」と知っていたからです。

1871年に、労働者階級が主体となった「パリ・コンミュン」が設立する直前のパリでは、オペレッタは、敵・味方・観客たち三者が一緒になってウソツパチを楽しむ、変な芸

術です。戦争は、先ず、二つの誤解から生まれます。「宣戦布告」と「風聞」です。

## 宣戦布告はだれにするのか？

宣戦布告は、相手国に対してするのではなく、自国民に対して行うものです。これは、いまや、鉄則です。戦争に出かけるのは、いつも、自国民自身だからです。それで、国家が先ず戦うべき相手は、自国民の厭戦主義者です。なによりも、国民に戦う覚悟を決めさせなければなりません。また、同時に、両国の国民に、国を逃げ出す猶予を与えるためのものでもあります。「戦争とは国と国が相互に攻め合うことであり、人間と人間が相互に戦うことではない」とルソーもいっています。国は必ず国を敵とするのであって、ひとを敵とすることは出来ないのです。

オッフェンバックから 100 年後のアメリカでは、1965 年頃からヴェトナム戦争への軍事介入が本格化するにつれて、学生の間で戦争反対の運動が始まり、民主社会をめざす学生組織が 2 万人を集めてワシントンで集会を開き、ジョン＝バエズが反戦歌を歌いました。また、1967 年の反戦集会は、それまでで最大の動員を実現させ、世界中でベトナム反戦の声が広がり、ここでもピーター・ポール＆マリーが反戦歌を歌いました。そして次第に、世界中の大学で「スチューデント・パワー」が盛り上がり、多くの若者が長髪とボロボロのジーンズというヒッピー姿で現れて、従来の価値観を否定する「カウンター・カルチャー」（アメリカの伝統的な中産階級の文化や道徳に反発した文化）が花開きました。自由に反戦を唱えるそんな若者たちは、次に、1969 年にはウッドストックのような音楽の解放区へと向かいました。ここはまさにオッフェンバックのブフ・パリジャン座です。すべてが自由で、解放されていました。

## 国家と風聞との戦い

次に、次に国家が戦うべき相手は、「風聞」（ふうぶん: rumor）です。いまの言葉で言うと、「フェイク・ニュース」（偽情報）です。政治には、常に偽情報が付きものなのですが、特に、戦争では日常茶飯事です。日々、情報合戦です。戦争ほど、当事者たちに、疑心暗鬼をもたらすものはありません。「相手の国はすでに核の準備をしている」というのがもっとも注意すべき恐ろしき「情報」です。それも、根拠のない「風聞」で伝わってきます。風の噂です。中江兆民はそれを、「恐外病」（きょうがいびょう）といいました。

もし恐外病を根本から治そうとするなら、ひろく教化に努めて、人々に物質的な美と普遍の理念である善との区別を明らかにするほかはない。学問がどれほど高遠であっても、権勢がどれほど盛んであっても、名声・人望がどれほど高かろうと、子として父を虐待し、夫として妻を苦しめ、友人をあざむき、その他さまざまの道にはずれた行ないをするようでは話になるまい。わが国家がいかに強く、隣国がいかに弱くても、理由もなしに隣国を攻撃するようではどうにもならない。富や名声などが普遍の真理にうち勝つことはないのだ。 【中江兆民「一年有半」】

中江兆民は義太夫が大好きでした。夏目漱石は落語が大好きでした。漱石の『坊っちゃん』も、『わが輩は猫である』も、『虞美人草』も、まさに落語の文体です。義太夫も、落語も、ブフ・パリジャン座のオペレッタと同じ舞台芸術です。話し言葉で、生身の人間が、「美と善の区別」（ここはよく分かりません）を説いて聞かせる「台詞劇」であり、「対話劇」であり、「会話劇」です。まず、舞台の上と下、よくお互いに通じ合う言葉でもって話合うところから「恐外病」対策は始まります。会話体で語られる舞台芸術は、そのためにあるのです。

そういえば、ヤンキース・スタジアムで、ファンから一斉に大谷翔平に浴びせられた大き

な抗議のブーイングは、客席からの異議申し立てです。あまりの大声に、私も思わず、笑ってしまいました。ブーイングしているヤンキース・ファンも、みなさん、笑顔です。ヤンキースへの入団を蹴ってドジャースへ入った大谷への恨み節です。ここには、「恐外病」はありません。ただただ、敵方の天才強打者への「美への嫉妬と善への賛辞」です。上手い！（笑い）

## 舞台の上・下

さて、ここで「風聞」が出てきた手前、たまたま、この文章も、オッフエンバックと兆民が同時に論ぜられるハメに陥りました。この僥倖(ぎょうこう:偶然に得うる幸せ)を幸いに、この宣戦布告と風聞の両者を一つにして「戦争論」を論じるならば、オッフエンバックが、自分の劇場まで提供して「反戦オペレッタ」を上演したにもかかわらず、パリの観衆から、戦争に反対する反戦指導者や反戦グループが、また、「風聞」に対抗する「正論」を論じる者たちが、一人も、一団体も、現れなかったのかを考えるのに良い機会です。

兆民はこのことについて、「自分で『戦争反対！』だと思っけていても、直ぐに発表してはいけないのだろうか？」（『思うに想は隠匿すべからず』）と疑問を呈します —

人の思想は、発表してはならないのだろうか。むかしは、浅薄にながれることをいまして、深沈淵穆(しんちんえんぼく:深く沈め、あおく輝きだすまでだまっている)を尊んでいた。人の思想は、隠匿(いんとく)していなければならないのであろうか。ひとは、公明正大でこだわらないのを貴んで、陰険にかくしてはならないといましている。隠匿しないでおこうと思えば、うわついた浅薄さのそしりもあり、発表しないでおこうとすれば、陰険なトリックとそしられる。公明を求めると、浮薄に流れやすく、だまっていれば陰険におちいるだろう。右をむけば左に背をむけることになり、一方をえると、他方を失う。この矛盾は、どちらにしたがうべきだろうか。

思想は発表しなければならないものである。心の状態には形がない。思想は心に存在するのだから形に見ることはできない。かならずことばに出し、文章がに書き、行動にあらわしてから、やっと知ることができるのである。天は靈智を人に与えたが、人にはおのおのいろいろな思想がある。人の心がそれぞれの顔のように同じでないごとく、思想は千差万別であり、はかりで測定することなどはとてもできないのである。自分と他人は同じでない。現代人と古代の人は同じでない◇東西南北の人びとはそれぞれ違う。

かりにも、世の中の進歩にしたがい、文化の発達を促そうと欲するなら、人びとはたがいに助けあい、益しあうべきである。ひとりよがりの自習などはすべきでない。思想はすべからずことばに、文章に、行動に発表して、かくすことがないようにすべきである。身体のうちにしまいこんでしまって、あたかも唾のように、あたかも木や石のようになるべきではない。

国勢をこうさせてしまったのは、国力がまだ一つになっていないからである。国力が一つにならないのは、人びとの思想がまだよくたがいに通じあわないからである。政府、人民、朝野、上下の思想がまだたがいにあい通じていないからである。

おのおのの其のことばも志もない。「忠告善導」もない。「切々憫々」(せつせつし:たがいにほげましあうこと)もない。「侃々閤々」(かんかんぎんぎん:大声で論じ穏やかに論ずること)もない。たがいに疑いあい、面従腹背し、あいも変わらぬ封建割拠の遺物、いな、あいも変わらぬいぜんたる東洋の孤島の風習である。私は思うのだが、この思想を隠す習慣、にせの深沈淵穆は文明の進路には大きな難関だ。この難関を打破しなければ、文明の領域は、はるか

数倍万里の外にあることだろう。われわれが文明に達することができるのは、いつの世になるかわからない。

「すべからく、持論は発表すべきだ」というのが兆民の答えです。むろん、これを、日本で、明治14年（1881）4月2日に書いた兆民は、ブフ・パリジャン座に来ていたパリのフランス人のことを考えていたことでしょう。兆民がフランスへ留学したのが1871年です。この《ジェロルスタン大公妃殿下》が初演されたのは1867年です。きっと、兆民はこのオペレッタを観ていたにちがいありません。そして、フランス語が得意の兆民は、戦争についての談論風発の仲間に加わったことでしょう。むろん、当時のパリの言論統制は極めて厳しいものがあつたと思われまふ。それに、国勢がいまだ現れないときの日本と違って、すでに数々の国勢が現れて、千々に乱れている時代でした。舞台が跳ねたあとで、いくつものグループが分かれ、それぞれに戦争について主張を述べ合つたことでしょう。この「思想は発表しなければならない」と言う兆民の論旨は、この時代のパリ人の言動から刺激を受けてのことでしょう。それで、帰国した兆民もまた、嬉々として「東洋自由新聞」の主筆を務めました。

【2024/06/20 都築正道】

